

小野 あずさ

片足の生活2

ブルガリアで足首を怪我してから、2ヶ月が経ちました。ロンドンに到着してから、なかなかすぐにお医者さんに診てもらえず、うずうずした日々が続きました。

英国の医療システムについて少し触れますが、英国にはNHS ナショナルヘルスサービス（国営医療サービス）があり、国民保険（National Insurance、以下NI）を支払う人、そして移住権のある人は皆、医療費が無料です（薬や消耗品は有料ですが）。適切なビザ/パスポートを提出してから面接を受け、NIに登録すると、NI番号を国からもらえます。それを収得しないと、基本的に英国では働けません。よって、働く=国民保険を支払うという義務が与えられます。移住権、もしくはNI番号がないと、GP=一般医師機関に登録ができない、つまり医者に無料で診てもらえないということになります。日本の国民健康保険と違って、診察や手術は基本的に無料ということです。

自分も英国に来て、学校に行きながらアルバイトをし始めるときに、国民保険に登録しました。その時点では、永住権をもっておらず、学生ビザでしたが、学生は限られた時間、働ける権利があったので、わりと簡単に国民保険に登録できました。高収入、無料医療システムを目的に、海外から移民がどっと押し寄せて来た理由がよくわかります。とにかく、重症であろうとなかろうと、そのような便利な医療システムを利用する人口があまりにも増えすぎて、医者や看護婦の人数が仕事の量に追いつかないのが、ここ数年で大問題になっています。そのうえ、国が医療機関への予算を大幅にカットしたせいで、英国内の医療システムはパンク寸前と言っても、過言ではないでしょう。それにも関わらず、NHSにはよくお世話になっている私…。なんとか、この危機をNHSに乗り越えて欲しいものです。

そんなこんなで2週間待った末、ようやくロンドンのお医者さんに診てもらうことができました。ブルガリアの包帯グルグル巻きのギプスから、安定したキラキラ高性能樹脂ギプス（誇張しすぎ?!）に替えてもらって以来、大分足のむくみが和らいだ気がします。そして4週間後（先週）ようやく、ギプスから解放されました。ギプスが取れても、すぐに普通に歩けるわけではないので、毎朝エキササイズをして、足首を鍛えています。



Gate Theatreでのシュート風景

振り返ってみると、この片足生活約2ヶ月間は、本当に長かったです！それでも、悪いことばかりではありませんでした。先月は、Notting Hill GateにあるGate Theatreで、English National OperaとGate Theatre共同制作のオペラキャバレー公演“Effigies of Wickedness”の照明デザインをさせていただきました。Gate Theatreはフリンジスケールの劇場ですが、ENOの機材とスタッフが入ってくれたお陰で、サイズの割には、込み入った吊り込みをさせてもらうことができました。そこで仲良くなったENOのプログラマーである、クリスティーナ・スミスさんには、大変お世話になりました。彼女と、ETC Ion卓でプログラミングをしていて、沢山のトリックを学ぶことができましたし、ENOの働き方などを聞くことができました。大きな劇場で働くことに慣れている彼女にとっては、Gate Theatreのような、ものすごく小さな劇場で働くことが、とても新鮮だったようです。お互いに、モチベーションが上がる楽しい仕事場になりました。松葉杖でシュートの指示出しや、実際に、杖でシュートの手直しをしていたら、スタッフに大爆笑されました。「This is the Japanese style of focusing lights!」と言っても、信じてもらえませんでした。楽しい現場の裏には、苦しみもありました。この公演は、実際にナチスドイツが戦争前後に禁止した曲を、オペラキャバレースタイルで再現した公演でした。ユダヤ人や黒人、ゲイなどがテーマの曲が多かったです。それらの曲を、現代の黒人やユダヤ人シンガーが歌うことは、歴史的距離があるとはいえ、精神的に辛いことだと想像がつきます。このプロダクションでは、どの曲をどういう意味合いでやるか、黒人オペラシンガーと、白人ミドルクラスの演出家が、揉めに揉め、リハーサルが相当遅れました。結局、通し稽古を見せてもらえないまま、仕込み日を迎え、時間のプレッシャー、演出家のストレス、プレビュー中の絶え間ない変更の嵐に、音響と照明チームは相当振り回されました。「日本でも、幕が開けた後に、こんな変更ばかりするケースは珍しいよ！」と、見兼ねてお手伝いに来てくれた鳥海咲さんも、こぼしていました。松葉杖で身動きが取りにくい私を「そこに座ってて、おばあちゃん！あのフォーカス直してくるからね」と、冗談混じりで励ましてくれた咲さんに、ありがとうを言っても言い足りません。